

# 王褒の生卒年について

沼 口 勝

六朝北周の人、王褒(字、子淵)は當時その才名の高さに  
おいて、庾信(字、子山)と並び稱せられた詩人である。た  
とえば周書にはつぎのごとくいう。

(一)世宗即位、篤好文學、時褒與庾信才名最高、特加親待、  
帝每遊宴、命褒等賦詩談論、常在左右。(周書卷四十一  
王褒傳)

(二)時陳氏與朝廷通好、南北流寓之士、各許選其舊國、陳  
氏乃請王褒及信等十數人、高祖唯放王克殷不害等、信  
及褒竝留而不遣。(周書卷四十一、庾信傳)

(一)は梁の承聖三年(五五四)、江陵が西魏(後の北周)の來  
攻にあえなくも陥落した後、俘虜として長安に移された王  
褒が、それより先、既に亡命していた庾信とともに北朝に  
仕え、その王室の厚い庇護を受けていたことを示すもので  
あり、また(二)は、梁の跡を襲つた陳と北周の間に修好關係  
が結ばれ、それを機に南北相互の俘虜交換が實現したが、  
王慶・庾信をはじめとする十數人の歸國を請求した陳に對  
して、北周の武帝(高祖)は、王慶・庾信の兩人の歸國を認  
めず、ただ王克・殷不害等の抑留を解いたにすぎなかつた

という事情を記すものである。いかにこの二人に對する北  
朝王室の愛着が強いものであつたかを、これは物語る。王  
慶・庾信への北朝王室の愛着、それがこの二人の文才への  
高い評價と深い關係を有することはいふまでもない。北周  
の王室も、六朝の他の王室に似て、強い文學愛好癖を持ち  
あわせていたのである。

さて右の短い引用記事によつても、王慶と庾信が當時併  
稱せられた詩人であつたことは充分に知られる。もつとも  
以上の評價が、そのまま後世に承認されていつたのではな  
くとよらない。庾信は既に唐代、杜甫によつて、その存在へ  
の深い尊敬と理解とを克ち得た。そして現代的な視野にお  
いても、六朝詩を集大成し唐詩の世界を啓く役割を果した  
詩人として評價され、中國詩史上に確固たる位置を占めて  
いる。一方、王慶は、現存の作品數も少なく、その詩人と  
しての位置も庾信のそれにくらべれば決して高いとはいへ  
ない。しかしながら、北朝に仕えるに至つてからのその詩  
は、河北の荒涼たる景物を詠い(「渡河北」)、「送劉中書葬」  
「入關故人別」等の諸詩)、望郷の念と人生への感慨とを訴

えて「送劉中書葬」「和殷廷尉歲暮」等の諸詩)、切々たる哀感に満ちたものとなつてゐる。

部分的には繊細鋭敏な感受性と巧緻な修辭的技法の驅使とによる秀れた敘景表現をもちしたが、結局は宮體詩風の中より出るものとはなりえなかつたのが、梁の頃の王襲の詩であつた。したがつて、晩年の作品の切實な悲哀と寂寥感に満ちた詩風は、梁の滅亡、北朝への移住という運命の激變が結果したものであり、その點において、庾信の詩風の變化とほとんど軌を同じくする。庾信もまた、北渡以前は輕艶な宮體詩の代表的作家であつたが、亡國の徒として異國に果てたその後半生の作品は、篇々慷慨の氣に満ちみちたものに變化した。しかも、後世庾信に與えられた詩人としての大きな聲譽が、實はその梁時代の作品に據るよりは、むしろ北渡後の作品に一層多く負うものであることを考慮に入れるならば、その生涯における南朝より北朝への移住という一事と後半生の詩風との關連は、中國詩史上の重要な問題であるというべきであらう。そして、この問題の考察には、僚友王襲の生涯とその作品の研究が缺くことのできぬものとならう。かくのごとく考ふるならば、中國詩史上に占めるべき王襲の位置は自ら定まる。すなわち、それはその作品のもつ個性において測られるよりも、より一層、庾信の詩風の變化發展する姿を解明するためのものとして意義づけらるべきであらう。中國詩史上における王

襲の位置は、なかなか重要なものといわねばならない。

ところで、王襲の生卒年について従來の文學史の著書も多くは、「不詳」の語をもつてその答へとしてゐる(いま手許にある著書をもつて例とするならば、劉大杰著「中國文學發展史」(中)、一九五七年、古典文學出版社。三四四頁)。また、やや良心的に凡その推定を下して記した著書もないわけではないが、それらはいずれも未だ充分に正確ではない。たとえば、陸侃如・馮沅君著「中國詩史」(中)(一九五七年、作家出版社)は、「公元五〇〇?—五六三?」と疑問符をうちつつ推定する(二九九頁)。また、更に最近上梓された譚正璧主編「中國文學家大辭典」(一九六一年十月、香港出版)は、つぎのごとく記す。

王襲(公元?年—五七一年左右)

王襲字子淵、琅邪臨沂人、王規之子、生年不詳、約卒於周武帝天和末年、年六十四歲。

すなわち、一は「公元五〇〇?—五六三?」とし、他は「公元?年—五七一年?」とするこの二つの説が、ともに正確さを缺いているものであることは、つぎに引く周書の記事によつて明らかである。

(三)(王襲)建德以後、頗參朝議、凡大詔冊、皆令襲具草。

東宮旣建、授太子小保、遷小司空。(周書卷四十一、王襲傳)

(四)建徳元年四月)癸巳、立魯國公贇、爲皇太子。(周書卷六、武帝紀)

(五)建徳元年四月癸巳、高祖親告廟、冠於阼階、立爲皇太子。(周書卷七、宣帝紀)

(三)の周書本傳の記載の中、後半の一節「東宮既建云云」は、(四)、(五)の記載と併せ考えれば、建徳元年(五七二)四月、魯國公贇の立太子以後に、王褒が太子少保となり、また小司空をつとめたことを示すものであり、更にその前半の一節「建徳以後云云」によつて、建徳年間中にも、王褒が依然として活躍していたことが分明となる。したがつて、五六三年頃を卒年とする「中國詩史」の推定はもとよりのこと、天和末年前後と考える「中國文學家大辭典」の推定も、不満足なものとして退けられねばならない。

さてそれならば、王褒の生存はいつたい何年まで確認されるのであろうか。私は、それを建徳四年(五七五)七月までと考えるのである。この斷定は既に(一)として引いた周書庾信傳の記事と、つぎに示す南史及び周書の記事をその論據とする。

(六)太建七年、(殷不害)自周還、(南史卷七十四、殷不害傳)

(七)(建徳四年秋七月)申戊、陳遣使來聘(周書卷六、武帝紀)

(一)の庾信傳は、周陳の修好が成つたのを機に、陳が王褒・褒信等十數人の歸國を請うたところ、北周の武帝は王克・殷不害等の歸還を許したのみで、王褒・庾信の二人につい

てはこれを認めなかつた旨を記すものであることは前に述べた。

ところで、(五)の南史殷不害傳によれば、この「南化流寓之士、各許還其舊國」の事は建徳四年にあつたとせねばならない。殷不害が周より歸還した太建七年は北周の建徳四年に當る。これを武帝紀の記事に徴すれば、(七)の四年七月の陳使の訪周がある。おそらく、この訪周は褒信・王庾等の歸國を請うことも、その目的の中に含まれていたものであつたであらう。もつとも、周陳兩國の接近は、これ以前に既に始められていたものと思われる。武帝紀・建徳二年正月の條には陳使の訪問が記載されており、翌三年の條には廡愷等が陳に使した旨の記載がある。しかし、同三年に陳使の訪周した記録は見當たらぬから、前述の庾信・王褒等の歸國が陳使により求められたのは、建徳四年七月の訪周の際であつたとしても無理ではない。

さて、以上のごとく考えるならば、この時まで王褒の生存は確認される。周書本傳に、その卒した時の年令を「年六十四」と記してあることから、少なくとも王褒の生卒年は「五一二―五七五年」の範圍まで下降させることが可能である。王褒の實際の生卒年は、この「五一二―五七五年」よりも、或は一、二年下るものであるかも知れない。しかしながら、現在のところこれ以上の詮索は不可能であり、一應右の年代に近いものをその生卒年とするのが最も妥當

である。

近似値しか出しえぬという點において、以上に略述した私のこの小考察の結論も、「不詳」の語をもつて答へとする従来の文學史の著書、また「中國詩史」「中國文學大辭典」等の大體の推定を記すものと同列であるに過ぎない。しかしいかに僅少の差異であらうと、可能な限り事象の眞實な姿を把握すること、それが文學史の進歩に資するものであると私は考える。この小さな考察を敢えて試みたそれが理由である。

(注)

①杜甫はその詩中において、しばしば庾信について觸れている。「漕新庾開府」(春日憶李白)、「庾信文章老更成、凌雲健筆意縱橫」(戲爲六絕句)、「庾信平生最蕭瑟、暮年詩賦動江關」(詠懷古跡)、等の詩句がその例である。

②たとえば、「中國文學史」(一)(一九五九年、人民文學出版社)はつぎのごとくいう。「庾信的藝術造詣很高、對其後詩歌的發展有很好的影響。他是六朝集大成的作家、又是唐代詩歌高潮的先驅。他在文學史上起了承前啓後的作用。」(云々)(三四五頁)

(大學院修士課程)